祝詞 令四家歳旬集

へ5
1499
1

国立国会図書館
請求記号 1499
巻 1

今回家選

序

らそ　おのつの四天のゆもしみて四海ふ
高傑の名をあくへくそ　牧のまゆへら
らそ　をといふ

二段中二菜自和社

大国天奇洞

あらなんえんん人ぐとつけるまいん

ふる紙袋うるる句又多かる人〳〵程

一書のうしぬる

後篇の時とさるもの注へ

歲旦	春著	かるる	若葉	野老	東風	警	初午
筆始	數へ	松の月	正月	余寒	春の雨	春の水	春の月
春風	永日	椽	葉の茶	もとゐ	雲雀	揚雲雀	初燕
蝶	雛	つま兒	雪	霞	朧月	かすみ	ひかん
梅	柳	春草	春の雨	春の夜	春の山	春の水	つゝる
初櫻	もゝ	花	山吹	藤	躑躅	牡丹	芍藥

帰る	雁	遅桜	夫の客
北	遙	山	訪
国	雲	吹	来
鳥	やすらひ	つゝし	春栄
雪	猫の恋	汝	棠
残	柳	花	蓮
雪	さゝら		翅
			花

大黒蕃 寄測選

當市俳諧發句集

三ツ切本 全五冊 近刻

此書は文祿年間より當今の諸名家の發句を撰集し時中に愛吟ある内より春の部を抜き出し其上の句を初四時の系統に從ひ分類編輯せるものにて下段に發句の主松辺の名所へきのおよそ

巣	蒼	木	
且	虬	漫	
木	〃	〃	
乃	花	春	
戸	乃	夫	
を	〃	〃	
左	四	方	
右	方	夫	
へ	〃	〃	
明	花	春	
て	乃	夫	
花	春	〃	
乃	夫	〃	
春	〃	〃	

巣木乃戸を左右へ明て花乃春　蒼虬

白雲の封まゝかゝくて四方乃夫　〃

出逢ても名やたゝさるその夫　木漫

家さまざまにかやうに箕乃おさまるも　〃

えらやそよ末の春夫　〃

幕一つつまんてをやけさの夫　〃

元日や都ことほぐ乃良人
改年や月をそちらこちらのむの灰
さくまに声乃さくひそかなる
元日や五ふ角ある鉄人こそ雪垤
年玉の元日ハ物のむ万和
太箸
太箸をふくくみすてゝも一日うち雪垤
太箸をもめふ里川そのとそて蒼虫
雑
わが人乃ものともなすねうそ雪垤
注連そうまそて庵ハせうく那蒼虫

子日
二度のかりそめ小まの引雪垤
ふの好くいそ松そめの日木洒
子日ハー松そて人をまつ
ふ業
松そふ乾くふの葉計
川柳乃ふ向てふの葉哉
雪ま乃松そまをつたふ計
物ふ乃をそしそ松そ葉
雪ふしとゝる小口乃ふ葉哉蒼虫
犬一ツ生ふ立ふ小ふ葉哉の

秋くれ
仁和寺を
君ゆゑと
芹薺
つまつめぬ
十村の
堅
秋
秋の
万葉の
芽
松
雪旦
雪旦
雪旦

春雪

雪ふるなかそれやそなたの雪　蒼虬
雪ふるなかそれやそなたの雪
降くるやそれも春の雪
降くるや春の雪　雪桂
降くるや春の雪
降くるや春の雪
降くるや春の雪

うちひさの乃ちんたやして古るゝなる
うちひさす乃彩徳ちやゝ白ゝ李
うちひさやゝ紅小ゝ梅の衣
うちひさすもゝ行て乃ち朝日哉　雪旌
堂の足たて春ちり沖乃面
堂乃高て堂ちうつまるう
堂や杉の名ちゝ枕草一
堂にうそうて虫ちり杉乃夜
堂や一人ちたゝ家乃売
堂ゝ垂ちのゝゝ梅ちよ田井ゝ
堂の情春ちゝ語や亀乃舟

堂ちよりもみるよさゝちり垣
堂の雪ちゝ白傍乃少ゝ亀う南
堂ゝや一ロ生の仙ちれハ事うゝ
堂ゝ家整にゝ宿芦ちうふ
堂のゝのうゝ
堂乃鳥ちうゝ
くゝ事ゝふ堂のゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝ

梅

蛤の口なくとをもり乃風木洩

折うけて人味てみる梅哉　蒼虬

吉次とくくハくく梅乃も

大とらまちくいくしよや梅の花

梅　冬九
雪姓

梅の花
梅の花
梅の花

門二つの外ハ一つ
山川や校を校て
務の方四方ハ清
矢一本ささや梅
野ゆと隣ゆるや梅
百ゑ外やかりつ
梅て八旅百一けり
うえうまや
打外ても資乏
二本ゆをて一本
るえまうり梅

山ゆの尾ゑ引
灯をとつもせく
をおりかゑ
つるもとく四
ゑ仲ホ二ゑ
まえきんて入
移ゆまる月外
義をとまて
まくと鉦の
久ゑうへ八
家安のとまを

木海

小坂うら梅ぬるまん梅のえ

柳

蘿来を宝もち柳哉　蒼虬

衣うすく〳〵やうに木の芽立る柳

もち柳のなよ〳〵と小家うら

とくと茶ばたけいとゞ柳の糸青

北嵐の出てはうかゞ柳ず

柳すゞしいへとも柳ふとゝ雑

いとゞ柳ふたつ風ぐ柳うち

うぐいすもうめ梅ちむ

虫ありてうぐいすの巣

如是ぞ梅の外ゝ移ぬうめの花

梅に夜いさゝか雨をしめし波

二ひらうぐいす梅ちる雪

門役の若もうぐいす梅ちる

多まれまゝうぐいす梅のむ　万

うそのもち三月のまや梅のむ

梅折やはくもみよ人なさす旭

梅うち香ありうぐいすも来のさ

眼うまえにみよ日と梅

をまきうつする柳哉　雪柱
更科のさらしうつさん秋柳哉　雪柱
さらさらと白ふきうつす秋柳哉　〃
江乃柳さとの水汲るるそうり　〃
柳一さたにうつくしき波おりや　〃
海老とうり西瓜を刈てうる秋哉　〃
西行もさぞな今の柳　〃
くさくさも柳をとかるるそ哉　〃
柳又る庵や窓を移すらん　〃
寂寥のよさふ又る柳哉　木海

一枝の柳のこころ哉　木海
嶺早く乃の雁てゐる柳哉　〃
やうそ我ともいへ柳先の柳哉　〃

美人
夕ぐれのふかふ来そうな美のそよ　〃
美のそよ吟のものうさよ　雪柱
美のそよわすれ草ぬし　〃
若草
美そや日に〳〵人のむつまじき　蒼虫
初午やうら手や狸の月ふたゝと有る茂　木海

ねえん今
福えん寺や中えんむやみ杉の色　一方和
彼岸
山さとによい鐘乃きこ彼岸哉　蒼虫
秋の雲
蓮すゝや日ぐれを待て几巾のこる　雪旌
雲雀
雲雀や鯨よりも人おいる　木洒
なすあるゝ如くなき雲ひばり
ひよ鳥や声四一枝ゝ夕ぐれ李　蒼虫
淡らかな雲乃丘乃家、

夕ぐれ淡乃
陽炎
陽炎や紅ひおとるゝを待て、
陽炎や日ぐれへ向ふ牛の鼻、
陽炎や向ふえんぶえ杭より、
春水
苔乃中ゆくそゝ春水、
てをちのこる後をうつる白の水、
春雨
ぬるゝ人ハなてふ春乃雨、

春の山　木海

家裏のもち住吉の郭うり春の山

春夜　雪旌

春夜の酒すゝりあし　蒼虬

春のよの乳もの笹鳴うす桶　木海

春のよの噂ちらほら不二の山

春のよやおぼろ夜の月にちひさまの松と牡丹

山陰乃雪六夜の夜や松計まて

山の井に水の行ゝ好もり撥ぬ　蒼虬

撥ぬ

山乃井に水の行ゝ好もり撥ぬ　木海

以上八題乃春夜うち、

春夜

大方のものゝ音清う更ゆく夜、　蒼虬

ものゝねもおのにこもりて、

波音乃ちかくきこゆる李の、

虹乃ごとくに雨ふりそゝぐ、

いつゝゝ降て雨の上乃春の夜、　蒼虬

月惜のいまきおうちの月、

家富の極のけしきおうちの更ゆく月、

一村かくるやゝゝ暗う降る村夜、　雪堆

三条の橋の夫なれけるの月、

春風

春風や船よつゝゝ出たちう堤　蒼虬

植て見るやまのうのおゝきはて　木海

春風やくゝりとゝまのゝ、

会あると植そのゝ、

そゝうやそゝ里の先う里へ着る、

夫風のあるゝ八えゝ中芹田八、　万和

夫風や移てもおう宇宮の出、

永日

日長ゝゝゝゝう里乃和乃声　蒼虬

ゝ今まてゝゝゝ日ゝ行京　雪堆

永日や泊て八重乃布そ〳〵敷く　木海
庁そへつゝ行〳〵春へ生ひ出ん　〃
　　牡
大和路乃なんてもの赤楔　〃
俤船と春霞　〃
川遠く自つゝ行〳〵雪雄
ほかちよ春をかこつ　〃
月うすくてハあるものゝ楔　〃
ちら〳〵春暁をこゝろ雨　〃
　　菜の花
菜の花や少し入日う郎　蕎虫

寺の女夫ハ早〳〵と朱うり　木海
菜の花や牡の窮撃乃猫　雪雄
　　すゝ払
すゝ払そよ〳〵ちつゝ新もれぬし　〃
雪国さくふうりまうれすゝ払　〃
俤草そて唐すゝ払　〃
春のよもとゝ雨まうれ　万和
　　初桜
初桜八ふりさけつゝみさう　蒼虫
叫てそ来ぬ〳〵そやうこみさう　木海
そう桜ふの夕雪ちる　雪雄

燕

燕や洲田の土俵に菜を干て　雪柱
燕ふくつるもなく一分の光の漏　木海
燕　雀

節のへに白こうもりもとまりけり　蒼虬
軍の左をもとめ八文ある雪を踏　雪旌
鳴さまよひて夕ひさうそさめくらの行うかり　一方和

蜆

蜆の蠟や娘時雨かゝみひそう　一方和
蜆一ツ
蜆とるに除てうごく丁　木海
蜆汁に生そいうさまなる丁　雪柱
菴の春とすさまじうまなる丁
佐保姫にうしろを取て丁
蜆とらしと教もせず百蜆
みそ汁の中ものみ入れ
蜆水雲もおぼろの再もなれ
きのふのうなと共もへ降ぬ丁

二三合切ル交ヨアリ行ク南　雪雄
暁ノ羽ニ夕雨辺白ノ田ヨリ我
蛙
子ヲ抱テ梢ノ蓋ニテ蛙ノ
梢ノ〳〵ノ蓋ニテ蛙行ク
大河ニソヨル小川ノ
山ノ行ク行ク
ヨソ行ク松ノ
西風ヨノヨリ
猫ノ

麻の布の幕には隊と書く　一万和

やすらいのもよし

據も多もやすらいのもよし

桃

白侯さく菜ぐんをさく桃の花　雪堆

人の多かりけれはめでやすし桃のも

百姓の面ぬうまでやもふ暇　木洲

花

小さくたく流るふ花のさうき哉　蒼虬

花の比茶屋の速情はまく雪

ちる花のつふを飛なれ小蒸哉

脈ふて不ふ花の和尚飛ふ

むしくくふ花の如く

糸ふふ蚕ふ行飛ふ水　雪堆

同一白い三段合めふ花

糸種の昔たもなてもおちる

もの白日枝ふへ花ぬ人もなし

十人ふ九人人ハ桜ふもふ

人ふめる花の墨の売

義ふふ社売ふ

木海

[illegible]
[illegible]
[illegible]

人訪ふさくらやそのみてあそぶ
行雲あるタベも又に桜人　万和
月のあかい春のたまくらに桜ぐ
たのむ木いもとに桜のさきぐに
世の中に桜いろなるものなよく春
山ぬよ詮いつすさくらぐ

遅桜

春さくの嵐をさそふ雪雄
深々なるの里もさくら
山吹に一ひらふみやり人乃脊戸　蒼虫

山吹きつつ車、
山吹を入口にやぬ乃家、
山吹の春のうらの家うち雪雄
山吹よタベ乃雨　傘木辰　万和

散の双子ふきてりそへし　雪雄
海棠
海棠やくれ多れち跳　木海
芝翅
まん翅の美ハ都ねも花の时　蒼虫
蕨の花

俳諧今宮集夏之部目録

四月	杜若	麦秋	閑居	鵜牛	蚊帳	あやめ
猫	菱子	蚊の	打こま	狩	蚊	笠御免
灌佛	矢数	青梅	卯	浪業	大雲	着帷
矢数	短夜	菱	水鶏	初鰹	競馬	青葉
杜丹	一八	支木立	鶯音入	唐子	粽	若楓
子規	芙蓉	時鳥	營	坂巻	遠	百合

俳諧今宮集夏之部目録終

俳諧七部集　小本全二冊

澤	松	淺	雪
田	極	前	圃
蛍	良	夕	良
暑	雲	峰	夕
竹	婀	人	交
交	已	交	日
六	月	御	稜

俳諧七部集　小本全二冊

雪	菊	の	雲
白	の	花	雄
水	雫	日	破
仙	交	芝	蝉
庵	雪	雄	蝶
青	雪	雄	青

雪	菊	の	雲
白	の	花	雄
水	雫	日	破
仙	交	芝	蝉
庵	雪	雄	蝶
青	雪	雄	青

俳諧七部集　小本全二冊

雪	菊	の	雲
白	の	花	雄
水	雫	日	破
仙	交	芝	蝉
庵	雪	雄	蝶
青	雪	雄	青

漢師や學のはてゝ明すら

矣數

大矣數是や代乃翁　雪旌

經一夜

經ふるを水ふさゝるあしの名乃一ねし　蒼虫

みつよや五月の雨　雪旌

さゝうちをかけて乾る汗ふき

經机のおくにひらくて伊勢山　木海

石ふみ乃松ハ雪やすく　雪旌

噂やすれ夜ふを新すき芒うら

經おや月ものさみぬ垣のもゝ　万和

牡丹

ありたちと薄ぬ牡丹乃一ゝ束　蒼虫

折をゝ手ふ摘ふや牡丹にまのさら　雪旌

牡丹乃ふさゝ乃ふさゝ乃ふさゝ乃ふさゝ　木海

挿殺乃活ふ牡丹ふさゝ一ゝす

ふさゝ毎や牡丹ふさゝの水活ふ

系名ふ牡丹も染のけふ　万和

牡丹ふさゝ

灯火の打ふさゝ　蒼虫

ふさゝ乃ふさゝ

あふさゝ乃ふさゝ

雪旌
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
木海
〃
万和
〃

萩

木海
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
蒼虬
〃
雪旌
〃

卯の今てちる
十日にと呼て
ふきのとう
卯の花
卯のをと
卯のもや
卯の花乃
卯の花や
一八や
一八や後の世
卯の

麦秋

かくばかりうなくハとまで麦の秋　蒼虬

　　舟一のこして筆庵ふそ乃ほる　雪旭

いつまでて筆やゆく春の行衛　蒼虬

筆や桃山ごろの硯　雪旭

筆や牡丹ふ可きつゐて　蒼虬

筆乃すゝ世ハ義の幸うれ　木海

　　梅

梅や物や行やら知んなき春乃　木海

梅乃ゝ物ゝ行ゝやゝ

梅乃苦ゐ物のかくれ家　雪旭

　　蕨

看経や蕨のえぐみの身にしぬ　木海

　　立

雲に巣ごて水も軟む汀乃ゝ

　　牡丹

ぬくもりの引ぬ牡丹の仕舞ふて　蒼虬

あくまでもうつくしき牡丹乃後

　　蓮

蓮生乃花のたゝずまひ

雪旅

水鶏

夏海辺にて人々と詠み侍りける

暁の夢も涼しく吹く風に波打ち寄する沖つ白玉　蒼虬

庭の面に水鶏の叩く声聞けば真木の戸ごとに人ぞ驚く　万和

水鶏

夢とだに思ひ分かぬ現にも音入

雲雀

夢

夢路ゆく我が衣手の露ならば夜深き月の影や宿らん

我が袖の上に露おく夏の夜の夢路はかなき心地こそすれ

夢とだに思ひ分かぬ現にも音入

[illegible]
庭過て里びもとめ[illegible]
材木の[illegible]買[illegible]
蝸牛

帆[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

蒼虬
雪旌
万和

木海
蒼虬
雪旌
万和

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

蚤　蒼虫

蒲のうた枝うつり行く　雪旦

蚊　老

根引て這なれにけの蚊を哀
新ら畳乃隙くまもれ雨の蚊を哀
夜のともしびはうちの行るなを哀
哀くとひはき消すも蚊やり哉　木洒

蚊帳　蒼虫

くれ竹より蚊帳作男や菜花
新ら畳乃隙くまはうちの行乃帳

川狩よくうつ蚊やり哉　雪旦

蚊

家ひとり暗ひ出て行方に鳴蚊
火元出
次の間瀬の音ふとり虫
そよ〳〵と風分今ぞ〳〵て火とりむし
火とり虫吹消されて行羽をやすめ
灯を消て家を恋やる夜の虫

競馬

棹うつ先くに人あらそへる　一方和

気をあれもてゝ粉乃餅使　蒼虬
河芽なる野老そこてほる　雪旌

遠
廉刈をはれなくおもふ、
松うらやとをへたてゝ苔　蒼虬

あやめ
苔清の口水乃うき緒をはふる亀　雪旌
号弁にてうたふものなれ、

世を頃も
ほそ頃も仕ふてをそ春の
世を頃も仕給ふ君を祝ひて　蒼虬
号弁　雪旌

号弁に花市ふくる春の野辺　雪旌
号弁や雨ぬくまれ花のかて　木海

世を
日を頃をそをうたふ分乃をすれ、

花　樗
頃夏うをそとりもち　樗　木海
せのつたは色をそうし樗乃末　雪旌

乃合
る合切をそくて雨やその上　蒼虬
る合せをそ人やふをそを乃合乃　雪旌

萍

萍の浮きつつ寄せて
藤子

萍をとりもちつつも
遠方に
遠方に旅寝
萍乃花

萍の花をかざしつつ
苔の花

萍の末枯れぬれば
雪の末
雪の末

萍の浮きつつ寄せて
萍

萍をとりもちつつも
遠方に旅寝
萍乃花

萍の花をかざしつつ
苔の花

萍の末枯れぬれば
雪の末

萍破日

さゝげ実下焼きて黒色を現すを
粉擂をとれ白乃ごとくなるを用ふ
造る乃酒ハ白くさうこんを加うる
赤色をさすを用ふ
大きなる引ずいを用ふ

五月雨白乃名ある牧あり漁村或ハ、
又青白の色ハ芦生ずる所ハ雪柱
雪の降ハいつれ山ふかき所ハ雪
降るとも消て五月雨ハ降ざるゆへ
さゝげをとれ白を用ふ

木海

蒼虬

そらの色ハ空端の一本木ハ
空村ハ名ハ地ハ、
降ざるの雨のあるまゝ
さゝげの赤きを用ふ

五月雨に海ハ
火串
杜のごとくの雨を事ハ

麻

鈴の牧まで麻の中、
塵家の西日をさけて麻畑

木海

蒼虬

雲龍

雲龍や吹るの如ハそうふ　雪旌

夕鳥

夕鳥やと呼ぶ声の元、
夕鳥やたゞうみをいそぐ、
夕鳥にうそりうそりと初秋、
夕鳥よみあそけり古さら　蒼虬

仏

疾仏のまうすや秋の声　雪旌
夜さまのあるとう汲て兼よう案　末満

蟬

つくつくしくとして蝉乃声、
うつ蝉う啼ハ（て）と樟　枕、
帰去をまつ（ふ）かひそ蝉の声、
木のあや（ゝ）白浦て蝉（ゝ）う秋、
外蝉やこゝ（ゝ）の指金のう外、
蝉啼やこゝ（ゝ）ふまき（ゝ）ちなく、
父亡の忌ハ今日のあれハこそ蝉の色　雪旌
蝉

蝉をまつ時ハちゝ（ゝ）れこゝ秋うそ　雪旌

暑

暑さうつる　木海
暑さうつる　蒼虫
暑さうつる　雪旅
暑さうつる　木海
暑さうつる　蒼虫
暑さうつる　木海
暑さうつる　蒼虫
暑さうつる　木海
暑さうつる　蒼虫